

● 北京外国语学院 沈茅一 主编

日本語

5

日 本 语

(5)

沈茅一 (主编)



高等教育出版社

(京)112号

内 容 提 要

本书是《日本语》系列教材的第5册。本册由10课构成，结构与3、4册大体相同。作者从成人自学的角度进行选材和编写。本册以提高阅读能力为主，课文语言规范，体裁多样；语法和词汇说明部分详实具体；练习部分密切配合课文和语法。为便于自学还设了自我测试题。

本书可供具有一定日语基础的学生和自学人员使用。

责任编辑 祝大鸣

日 本 语

(5)

沈茅一 (主编)

鲍显阳 朱春跃

合 编

*

高等教育出版社出版

新华书店总店北京科技发行所发行

河北省香河县印刷厂印装

*

开本 850×1168 1/32 印张 12.75 字数 308 000

1997年7月第1版 1997年7月第1次印刷

印数0 001—808

ISBN7-04-003833-1/H·430

定价12.30元

前 言

本书是应成年人自学日语的需要而编写的。全书共分六册，一、二册为初级教程，主要学习基础语音、语法、词汇等，课文采用会话体，在内容上主要是日常生活的场面，力求兼顾语法体系和交际需要，每课附有简单的日常生活用语。三、四册为中级教程，主要对一、二册所学的语法、词汇等进行巩固、补充和提高，并使之系统化。这一阶段的课文编写，选用了各类生活、知识性的浅显易懂的文章，逐步增加有关日本情况的内容，并根据需要，对选用的文章部分地进行了删减、改写。五、六册为高级教程，侧重于提高阅读、理解及翻译、表达的能力，课文全部选自原文。包括语言、文化、科技、自然科学、人物介绍、游记以及小说、随笔、评论、报导等各种体裁的文章。考虑到自学的困难，对原文中过于生僻的词语或较抽象的表达进行了适当的删减和改写。全部六册学完之后，可达到大学本科生从头学起班三年级上学期的水平。

为了帮助学习者掌握所学知识，本书尽可能详细地进行了注释，并针对难点、重点安排了“语法和句型”，第三册开始增加“词和词组”，以便进行系统的语法、句型、词汇的学习。

每一课都安排有形式多样的练习，并在每一阶段安排了“自我测试题”，以便读者自己复习、检查掌握的情况。（在一、二册中还编有复习本阶段语法和句型的复习课）。

本书后附有课文参考译文、练习及自我测试题参考答案，语法项目索引和句型索引等，为读者使用本书进行自学提供了更多的方便。

从第三册起，为扩大词汇量和知识面，提高阅读理解的能力和速度，每课都安排了一至二篇难度略低于课文的“课外阅读”，其中的难点以“课外阅读注释”的形式予以解答。此外，三、四册每课还安排了有关日本和日本语的“小知识”。

本书正式出版前曾在北京外国语学院函授班、夜大学及公外教学中试用多年，并在此基础上经过反复讨论、修改而成。它除了适用于初学者外，也适用于已有一定日语基础的自学者及日语专业的学生、第二外语学习者；还可用作日语教师备课的参考。

本书曾数度易稿，书中的课文注释、语法、句型、词汇的选择分类、用法解释及对比归纳等集中了编者多年来的教学经验，吸收了当前国内外日语界的一部分最新研究成果，同时，还得到了我院几任日本文教专家的帮助和指导。但限于编者的水平，加之编写自学教材是一次新的尝试，因此书中难免有疏漏、不妥之处，诚恳希望广大读者和同行提出宝贵意见。

本书由北京外国语学院副教授沈茅一主编，参加编写的还有鲍显阳、朱春跃。同时也得到了我院文教专家岩上治和远藤明生先生的帮助，在此谨表诚挚的感谢。

编 者

1990年8月

目 录

第 1 课 科学的な考え方	1
生词	5
课文注释	9
语法和句型	12
一、日语的指示代词	12
二、格助词 に和と	13
三、副助词ばかり的用法小结	22
四、～限り	24
五、(もし)～たら(ならくば)～(かも知れない)	25
六、接尾词 ぐあい	26
词和词组	26
一、そこへ	26
二、やむをえず	27
三、もと	28
四、ごく	29
五、むしろ	29
练习	30
课外阅读一 日本の秀才もアメリカの大学では零点	34
课外阅读一注释	35
课外阅读二: ベートーベンの手紙	36
课外阅读二注释	38
第 2 课 盲目の名僧	40
生词	44

课文注释	48
语法和句型	50
一、～を前にして	50
二、～というのは	51
三、～う(よう)じゃないか	51
四、自动词的被动态	52
五、日语的副词	53
词和词组	57
一、いったい	57
二、一人前	57
三、とりかかる	58
四、始末	58
练习	59
课外阅读一: 桶屋の思案	63
课外阅读一注释	64
课外阅读二: 馬宿の話	65
课外阅读二注释	68
第3课 身体に関する言い回し	70
生词	73
课文注释	80
语法和句型	81
一、接尾词 流	81
二、～につれて	82
三、接尾词 がち	82
四、日语的形式用言	83
词和词组	85
一、何気ない	85
二、よほど	86
三、もっとも	87

练习	89
课外阅读一: 心を伝える	93
课外阅读一注释	96
课外阅读二: 美しい言葉「ありがとう」	97
课外阅读二注释	99
第4课 富士山頂の愛の灯	100
生词	105
课文注释	110
语法和句型	113
一、～さえ～ば	113
二、～ようになる(なった)	114
三、～う(よう)とする	115
四、～にきまっています	116
五、～おきに	116
六、～より(ほかに)方法がない	116
七、～だけ(の)～	117
八、自动词和他动词	117
词和词组	122
一、～といって	122
二、～たまもの	123
练习	123
课外阅读一: 弟のやけど	127
课外阅读一注释	129
课外阅读二: ボッコちゃん	130
课外阅读二注释	134
第5课 勤勉	137
生词	140
课文注释	146

语法和句型	150
一、接尾词 化	150
二、～おそれがある	151
三、見た目に～	151
四、～はどうだ	151
五、～て仕方がない	152
词和词组	153
一、およぶ	153
二、なんとなく	154
练习	155
课外阅读一：新聞の記事	160
课外阅读一注释	162
课外阅读二：もう一度考える	163
课外阅读二注释	165
自我测试题（一）	167
第 6 课 愛の鍵	171
生词	174
课文注释	178
语法和句型	181
一、副助词 だって	181
二、～たところで	182
三、～て（で）ならない	183
四、日语的终助词	184
词和词组	191
一、それでも	191
二、つい	192
三、いまさら	193
练习	194

課外阅读一: 学ぶことで自分を変える	197
課外阅读一注释	200
課外阅读二: 花嫁	200
課外阅读二注释	201
第7課 知魚案	203
生詞	206
課文注释	210
語法和句型	213
一、格助詞 に (10)	213
二、接尾詞 かかる	214
三、～にもかかわらず	214
四、～はおろか	215
五、接尾詞 ぬき	216
六、～にとって	217
七、～に関する	217
八、日語的复合動詞	218
練習	222
課外阅读一: アイザック・ニュートン	225
課外阅读一注释	227
課外阅读二: 人間を知るために	227
課外阅读二注释	231
第8課 食品公害・生物的濃縮の原理	233
生詞	237
課文注释	241
語法和句型	244
一、～ばかりか	244
二、～ている	245
三、～つつある	245

四、副助词 ほど	246
练习	247
课外阅读一: 栄養の秋	251
课外阅读一注释	252
课外阅读二: ド・ロ・ボ・ウ	253
课外阅读二注释	255
第9课 ことばとイメージ	257
生词	261
课文注释	265
语法和句型	268
一、助动词 れる、られる的用法	268
二、～のに対し(て)	270
三、～とする	271
四、日语的接续词	272
词和词组	274
一、どちらかと言えば	274
二、一方	274
练习	275
课外阅读: 日本語の性質	278
课外阅读注释	282
第10课 長城	284
生词	288
课文注释	293
语法和句型	296
一、～とされている	296
二、数量词+する	296
三、～として知られている	296
四、～というか、～というか	297

五、～ずにはいられない	298
六、らしい的词性辨析	298
七、日语的接续助词	300
词和词组	308
一、当たる	308
二、それが	309
三、それにしても	310
练习	311
课外阅读: 母の思い出	315
课外阅读注释	319
自我测试题 (二)	321
【附录一】 课文参考译文、练习及测试题参考答案	325
【附录二】 语法项目索引	389
【附录三】 句型索引	392

第1課 科学的な考え方

寺田寅彦博士^{てら と とう ひ と は か せ}は物理学者^{ぶつり がくしや}、地球物理学者^{ちきゅうぶつりがくしや}であつたが、またすぐれた随筆^{ずいひつ}で著名^{ちよめい}である。元來随筆^{ずいひつ}というのは随想^{ずいしやう}があつて書けるので、文章^{ぶんしやう}がうまいだけでは随筆^{ずいひつ}にならない。寺田博士の随筆^{ずいひつ}は科学的^{かがくてき}にすぐれているところにその味わいがある。

関東大震災^{かんとうだいしんさい}の少し前^{まへ}、東京^{とうきやう}で電車が非常に混雑^{こんさつ}したことがある。そのころ寺田博士は神保町^{じんぼうちやう}の角^{かく}に立^たつて電車の混雑^{こんさつ}の様子^{かんさつ}を観察^{くわんさつ}し、「電車の混雑^{こんさつ}について」という随筆^{ずいひつ}を書かれた。

電車が始発駅^{しはつぱつ}を出るときは、三分おきとか五分おきとかきまつた時間^{かんかく}の間隔^{かんかく}で出るのである。しかし途中で何かの事故^{じこ}があつて何分か遅れることがある。そうすると次の停留場^{ていりやう}で電車を待っている人はだんだんたまってくる。そこへ来た電車には大勢^{おほしやう}が乗ろうとするので混雑^{こんさつ}し、電車はますます遅れるようになる。しかしこの電車が遅れると、その次の電車はすぐあとに追いついてくる。さらにその次の電車も追いついてくる。そうして何台かの電車が続いてくると、停留場にさしも大勢^{おほしやう}たまった人たちはほとんど乗りつくし、今度は逆に待っている人が少なくなる。そうすると停留場での乗降^{じやうかう}に時間^{かんかく}がかからないから、電車の進みが早くなって前の電車に追いつくようになる。それでますます空いてくる。

結局^{けつぐう}込んだ電車はますます込んで遅れるが、しばらくすると空いた電車^{からいたでんしゃ}が来る。空いた電車^{からいたでんしゃ}は早くなってますます空く。このことを心得れば、電車がしばらく来なかったあとたいへん込んだ電車が来たときは、これに乗らない方がいい。すぐあとに電車が続いて来て、二、三台待てば楽に空いた電車^{からいたでんしゃ}に乗れる

ことになる。これが寺田博士の意見である。

大正十年と言えば今から三十五年以上も前のことで、今日は電車運転の様子もよほど違うであろう。しかし、博士の意見はいつも真理で、こういう物の考え方は何にでも応用され、役に立つものである。

中谷宇吉郎博士は寺田博士の高弟であるが、北海道大学に教授となつて以来、雪や凍土の研究、最近にはグリーンランドの氷の研究などで有名である。博士もまた科学的な随筆をよく物される。その中の一つに次のようなものがあつた。

戦争中北海道の室蘭の製鉄所での話である。ここは戦前は海外から来る良質の鉄鉱を使って精練を行つてゐた。ところが戦争がはげしくなつてから海外からの鉄石が来なくなり、やむをえず北海道産の褐鉄鉱を使つてゐた。褐鉄鉱は水分の多い泥のような鉄石である。

冬になると北海道は地面が凍る。これは内地では見られない現象である。寒い日が続くとな北海道の土は凍ってくる。そして製鉄所へ運んで来る褐鉄鉱が、無蓋貨車の上で凍るという事件が起つた。凍つて表面がカチンカチンになると、これを降やすのにつるはしで壊さなければならない。それに手間どると貨車はたまってくる。これがまた凍るので滞貨がひどくなつてくる。それでこの問題解決のための委員会が開かれ、東京からもいろいろの専門家が集つて評議をした。どうしてもよい解決策がない。そこで低温研究の専門家である中谷博士に研究を依頼した。

中谷博士はまず褐鉄鉱を取り寄せ、これを低温室に入れ、列車の通る所の温度と同じようにし、列車の所要時間だけ冷却してみた。ところが褐鉄鉱は凍らない。そこでこれは凍らない、

何か他のことが悪いのではありませんかと言った。そしたら実際は凍るのだ、学者の研究と実際とはちがうと叱られた。

そこで中谷博士は実際に凍るところを見ようと思った。そして無蓋貨車に褐鉄鉱と一緒に二、三の助手^{じしゆ}と共に乗り込み、多分一日半ぐらいだったと思うが、貨車の上の生活をしながら凍る様子を見た。ところがやはり凍らない。低温研究室の中と同じである。

結局次のようなことが分った。褐鉄鉱が中まで凍るには、相当の時間がかかる。列車の運行^{うんこう}の一日半では、ごく表面は凍るだろうが取り扱いに困るほどは凍らない。ところが貨物列車^{かもつ}は旅客列車のようにキチンと動かない。ことに戦時中の混乱もあって、貨車が野外に数日置き去りになることがある。そうするとそれに積まれた鉱石は凍る。凍ったのがいくつか来ると、その取り扱いに手間どるので、あとから来たのが滞り、これが凍ることになる。結局対策委員会^{たいさく}を開くようなえらい人たちは、貨車運行^{じつじよう}の実情を知らずに、凍ることばかりを考えていたことになる。

特に推賞したいのは、中谷博士らが自分で寒い冬空^{かして}を貨車に乗り込んでみたことである。前の寺田博士の例^{れい}も同じように自分で往来^{おうらい}に立って興味深く観察された。科学ではすべて注意深く観察することがもとなる。

最後に失敗談^{じしん}もまじえて私自身の経験を一つ語ろう。

戦争の末期^{まつま}に私は家族を郡山^{こおりやま}の近くの穂積村^{ほづみむら}に疎開させた。以前^{いぜん}に私の家にいた女中の世話で行った所で、猪苗代湖^{いなわしろこ}からの安積疎水^{あそかそすい}によって地味は豊かで、人情もまた淳朴な土地であった。私は東京におり、時折ここに家族を訪れた。

初夏^{しよか}のある朝である。朝早く起きて、田のふちを流れてくる

水^{みづ}流^{りゅう}で顔^{かお}を洗^{あら}った私は、まばゆいばかりの緑^{みどり}の田の間を散歩した。稲^{いね}の葉^はの上には露^{いね}の水玉^{みずたま}がついているが、ことに目立つのは稲の葉の間に無^む数^{すう}に張^はられたくもの巣^{くものす}で、その白^{しろ}い糸^{いと}の上には露^{いね}の水玉^{みずたま}がついている。

私は歩くともなく田の間を歩いてくもの巣を見ていたが、その中に気がついたことがある。くもの巣には虫を取るために密にまかれた糸^{いと}があるが、中^{ちゆう}央^{おう}の部分^{ぶぶん}はややそれがまばらである。その中央の部分には、露^{いね}の水玉^{みずたま}がついていない。まわりの虫をとる部分には、一ぱいについているけれども。

どのくもの巣も同じである。それで私は疑^{うたが}いをもった。何故だろうと、観^{くわん}察^{さつ}をすることが科学^{だいいつぽ}の第一^{だいいつぽ}。次^{つぎ}には何故だろうと疑^{うたが}うのは、科学の第二歩である。

私はこれを物理現象として解しようとした。たとえばくもの巣^{ちゆうしんぶ}の中心部^{ちゆうしんぶ}にくもがいて、これが動くのでそこに水玉がつかないのではないかと。しかし夜間^{やかん}人の見えぬ時は格別、目につく限りくもは中央部にはいない。風によって揺らぐくもの巣が、中央部で特に動きがはげしいかというのも一つの疑いである。しかし実際はむしろ逆で、中央部は動かなさそうに見える。

結局いくら観^{くわん}察^{さつ}してもこの理由は分らなかった。それから数年の間、私はくもの巣を見れば水玉に気をつけたが、やはり中央部には水玉がつかないようである。穂積村^{ぐうぜん}で見たのが偶然のことではないことを立証するには、他の場合の観^{くわん}察^{さつ}をすることが必要だからである。

その中に知人関口博士^{せきぐち}がある科学雑誌にくものことを書いたのをみて、博士にあってくもの生^{せい}態^{たい}についてただした。博士はくものエキスパートだったのである。くもが尻から糸を出す穴は二つ以上あって、幾種かのちがう糸を出す。くもの巣を作る

最初^{さいしよ}は糸を遠くへ流したり、放射線^{ほうしやせんじょう}状の糸をかけたりする。それからごくあらく巣を作る。ここまでに使う糸を「あしばいと」といって、これはベトベトしない性質をもつ。それから虫をとる巣をぐるぐると巻いて作るが、この糸はベトベトした性質もっている。この巣を作るときに、くもは「あしばいと」を切ってゆくが、ただ中央にはベトベトした巣を張らず、あしばいとをそのまま残しておく。

以上の関口博士の話で、私の疑問^{ぎもん}は解けた。露の玉のついていたのはベトベトした糸で、つかなかったのは「あしばいと」だったのである。もし私がはじめから自分でくもの糸にさわって調べていたら、あるいはそのちがいをもっと早く見出していたかもしれない。これは科学者^{かがしや}としての私の手落ちである。

その後ある機会に千人ばかりの理科教育者^{りかきょういくしや ちようしゅう}の聴衆にこのことを話して、水玉のつきぐあいのちがうことに気がついた人があるかと聞いたら、二人ほど手をあげた。その理由を考えた人はなかった。

科学は毎日毎夜進んでゆく。それにたずさわる人は無数にある。しかしその仕事はすでに業務化^{しよくぎよう}されていて、それにたずさわる人は職業科学者^{しよくぎしや}になっている。本当の科学的な考え方の才能^{さいのう}を発揮^{はつぎ}できることはむしろ少ない。科学的な物の考え方は、むしろいたるところで発揮できる。ただその問題を捉えることがなかなかむずかしい。

(根据「素粒子の世界・学生社版・科学随筆文章」改写)

【生词】

すぐれる〔優れる〕③

(自下一) 优秀, 出色, 杰出

元来〔がんらい〕①

(副) 元来, 原来